

巻 頭 言

九州地区大学体育連合前会長 根 上 優

スポーツとリスクの人間学的研究に関心を寄せてきた者にとって、近年の山における中高年の遭難は最早、看過しえないところにまで深刻の度を極めている。中でも、2009年7月16日深夜から17日早朝にかけて、北海道大雪山系トムラウシ山(2141m)と美瑛岳(2052m)においてガイド3人を含む25人の50~60代の中高年が遭難し、うち10人が「凍死」したというニュースは、単なる山岳遭難事故を超えて「日本の山岳史上に残る記録的な事件」とも呼べるほどの衝撃力をもっていた。メディアは当初、風速20メートルを超える悪天候の中を強行したガイドの判断ミスと「低体温症」が10人の直接的な死因であることを強調していたが、その後、登山を企画したのが「旅行会社」であったことが判明すると、安易な公募登山、寄せ集めの登山客、ガイドの力量不足、登山への準備不足、未熟な登山技術と体力不足、変更のきかない日程、等々、一気に「ツアー登山」のもつ「落とし穴」へと報道はシフトしていった。実際、メディアは、旅行会社のパンフレットにある「楽ちんプラン」「重い荷物は持ちますよ」といった誘い文句や、生還した女性の「普通の観光旅行みたいな気持ちで行った」という言説を大きく取り上げ、この事件の背後にある問題を浮き彫りにしていった。

管見では、中高年の遭難が目立つようになるのは、深田久弥の『日本百名山』(1964)がベストセラーになり、「山歩き」がブームになった90年代末からである。98年には殆ど見られなかった『山歩き』の本が、99年から急速に増え始め、今では書店のスペースを大きく飾っている。この傾向はまさに、毎年7月に警察庁生活局が出す山岳遭難のデータと一致している。97年に961人だった遭難者数は、翌98年には1341人と急増し、10年後の2006年には、約2倍の1853人へと膨れ上がっている。さらに、遭難者に占める中高年の比率も、97年には75%、2006年には81%と、一貫して高い水準で推移してきたのである。

その後、トムラウシ山の遭難事件の原因究明は、日本山岳ガイド協会の「トムラウシ山事故調査委員会」に委ねられ、2009年12月7日に「中間報告書」が提出された。協会は、生還者等への聴き取り調査を通じて「今回の事件は未然に防げたはずだ」と断言しているが、一部の生還者の証言との間に「ズレ」があり、未だ原因は確定していない。

昨年夏、映画『劔岳』が空前のヒットとなり、また年間約30万人もの人々が富士山を目指した。あの悲しい事件はすっかり忘れ去られたかのようだ。まさに山々は「都市」と化し、若い女性たちの間で「山スカ」(山をスカートで歩く)なるファッションも登場している。さらにまた、新聞・テレビ・雑誌では「低山を歩いてメタボ解消」「ロープウェイでらくらく登山」「夏こそ山だ」等々、相変わらず魅惑的なキャッチコピーが躍っている。過去10年間で死者・行方不明者2582人、うち中高年が2331人という数字など知る由もない。

山は、遠くから見ると雄大で美しい姿形として目に映るが、一歩足を踏み入れると過酷な現実が待ち受けている。それゆえ、古くから私たちは、山には安易に入ってはならない、と諫められてきた。しかし今日、このようなメディア環境の中で、人間と山との間に存在した「境界」は液状化し、人々の意識の中に「恐怖」という防衛装置、「登山とは自ラリスクを冒す行動である」との認識がすっかり働かなくなっているのではないか。あらためて自己反省するとともに、大学におけるスポーツ教育と社会において展開しているスポーツの現実との間にある落差を埋めるためにも、登山と山歩き、運動とスポーツ、さらにはスポーツと冒険・サバイバルの違いについて日々の授業の中で学生たちに語りかけてみるべきではないだろうか。

目 次

巻 頭 言	根上 優 (九州地区大学体育連合前会長)	1
I. 体育・スポーツ教育		
1. 提 言 人間力を高める体育授業に向けて	根上 優 (宮崎大学)	5
2. 招待講演 大学体育の現状と今後の課題	山田 茂 (東京大学)	7
3. シンポジウム		
1) 運動部活動離れと同好会・愛好会志向を探る — 学生の運動・スポーツ意識と行動の調査結果から —	司 会 橋本 公雄 (九州大学) 演 者 相原 豊 (九州女子短期大学) 桑野 裕文 (九州情報大学) 立木 宏樹 (九州保健福祉大学) 郡 弘文 (日本文理大学)	10
2) 大学生の運動・スポーツ活動とメンタルヘルスの現状	相原 豊 (九州女子短期大学)	11
3) スポーツ行動の規定要因の視点から	桑野 裕文 (九州情報大学)	14
4) 学生気質の視点から	立木 宏樹 (九州保健福祉大学)	16
5) 運動部活動イメージの視点から	郡 弘文 (日本文理大学)	19
4. 研究発表		
1) 大学生の睡眠と生活リズム	飯干 明 (鹿児島大学)	22
2) スポーツ健康福祉学科学生を対象とした専門実技科目における 行動変容技法を用いた介入が健康度・生活習慣に与える影響	正野 知基 (九州保健福祉大学)	26
3) 大学生の運動行動変容と関連する諸要因の検討 — 定期的運動の阻害要因の特性および運動習慣との関係性について —	田原 亮二 (福岡大学) 中山 正剛 (九州大学大学院) 神野 賢治 (金沢星稜大学) 丸井 一誠 (福岡大学非常勤講師) 村上 郁磨 (久留米大学)	29
4) 大学生のスポーツ行動における Planned Behavior 理論の適用に関する研究 — 部活動所属者と非所属者の相違 —	野津 亜季 (九州大学大学院) 橋本 公雄 (九州大学)	31

II. 体育・スポーツ事情

1. 海外だより ― 海外研修生活の報告 ― オリンピックの首都 (Olympic Capital) から ―
..... 角南 良幸 (福岡女学院大学) 35
2. 大学めぐり ― 長崎純心大学 ― 熊野 晃三 (長崎純心大学) 38
3. 九州地区大学体育連合研修会
 - 1) 「体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議」春季研修会の概要 40
 - 2) 平成20年度春期「体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議」に参加して
..... 村上 清英 (福岡女学院大学非常勤講師) 41

III. 事務局報告

- 平成20年度 事業報告 43
- 平成20年度 理事会議事録 44
- 平成20年度 総会議事録 49
- 平成20年度 九州支部収支決算書 53
- 平成21年度 九州地区大学体育連合予算・補正予算 54
- 平成21年度 事業計画 55
- 「体育・スポーツ教育研究」の投稿原稿募集について 56
- 九州地区大学体育連合研究助成規定・研究助成施行細則 57
- 九州地区大学体育連合規約 58
- 平成20年度 九州地区大学体育連合役員名簿 59
- 平成21年度 九州地区大学体育連合役員名簿 60
- 平成20年度 九州地区大学体育連合 加盟大学および個人 61
- 平成21年度 九州地区大学体育連合 加盟大学および個人 62
- 平成20年度 賛助会員一覧 63
- 平成21年度 賛助会員一覧 63